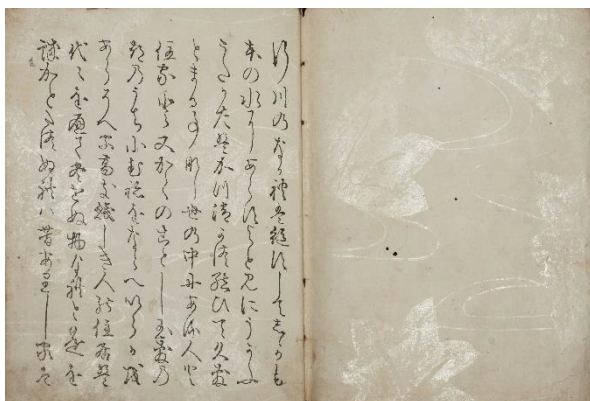


## [No.74] 災害と人の心 — 方丈記に重ねて —



**鴨長明**が「**方丈記**」を著して(1212年3月)から、八百有余年を経た。長明 58 歳の時という。その前の年には、優れた歌人として鎌倉に招かれ、実朝に和歌の世界を講じている。

「方丈記」は、短い随筆でありながら、現在ではわが国の古典文学の中でも名著中の名著といわれている作品であり、書き出し(写真 1:[1])は

「行く河の流れは、絶えずして、しかももとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例(ためし)なし。世の中にある、人と栖(すみか)と、またかくのごとし。」

という有名な文章である([2]による)。作品全体も、内容の深さはもちろんであるが、簡潔でわかりやすく、そしてなによりも流れる様な美しい漢文調の文体で綴られており、**ドナルド・キーン**をして「仏教の影響下で書かれた文学として、もっとも完璧な作品」(写真 2)[3]と言わしめている。

作品を買っているのは、仏教の基本的な教えである「**無常観**」であり、この世の中のものごとのはかなさに目を向け、そのことを人々の生きざま、うちつづくさまざまな災害体験の中でとらえ、そして、自らが里山に「方丈」(一丈四方=4 畳半)の庵を構えて隠遁生活に入っていく中で、「無常」に処する生き方を実践してきたさまを述べているのである。



本稿では、仏教思想に培われた処世観に関わる文学作品としての「方丈記」に言及するのではなく、**大災害の描写と被災民の心情をとらえた著作としての「方丈記」**を切り出して、その意味を、私自身がこれまでに体験した災害、あるいは現在、頻発しつつある様々な災害との係わりで、とらえなおしてみたいと思ったのである。

方丈記では、その序に続いて、この世の「無常」を悟るに至った事例として、長明が 10 歳代後半からそれまでの 40 年間に自ら体験してきた大きな災害を、方丈記の前段で順次取り上げている。具体的には、安元の**大火**(1177 年)、治承の**竜巻**(1180 年)、治承の**遷都**(1180 年)、養和の**飢饉**(1181-1182 年)、そして元暦の**大震災**(1185 年)である。

以下では、大地震を主体とした長明の災害体験における災害発生状況と被災民行動の描写を、私自身の大地震等の体験に重ね合わせながら、災害をもたらす人のこころの動きについて考えてみたい。

#### ◆元暦の大震災 — また同じころかとよ

「また同じころ(元暦2年)かとよ。おびたしく大地震ふること侍りき。そのさま、世の常ならず。山はくずれて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巖割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く駒は足の立ちどをまどはず。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、一つとして全からず。或はくづれ、或はた倒れぬ。塵灰立ちのぼりて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家のやぶるゝ音、雷に異ならず。家の内に居れば、忽にうちひしげなんとす。走り出づればまた地割れ裂く。羽なければ空をも飛ぶべからず。龍ならねばや、雲にも乗らん。恐れの中に恐るべかりけるは、たゞ地震なりけるとぞおぼえ侍りしか。」

2004年10月23日(土)17時56分、あの「**中越地震**」[4]が起きてから、まもなく11年を経ることになるが、私の災害体験の大きな節目となった。以下では、私が居住した長岡地域での本震当日の私自身を含めた地域住民の被災状況、被災直後の公共施設や学校等の避難所への緊急避難状況を、上記の方丈記に模して表現してみた。

「中山間地を多くかかえる中越地域、その地域で比較的浅い震源(深さ13km)をもつ直下型の大地震(M6.8)があった。大地が足元から大きく揺れる様(長岡では震度6弱)は、私にとっては未体験のゾーンであった。震源地は川口町(当時)で震度7、隣接する山古志村や小千谷市でも6強となり、いたるところで山崩れ(例えば、「**妙見県道の大崩落**」(写真3)で走行中の軽自動車<sup>1</sup>が埋まり、母子2名が命を落としたが、男の子1名がレスキュー隊に救助された)が起きて、土砂が谷や川を埋め、時にはダムを作り(芋川中流の土砂によるせき止めで「**木籠地区の集落水没**」(写真4)、景観や地形が原型をとどめないほどに変わってしまったところ(山古志役場付近から見た**景観破壊**)(写真5)もあった[5]。大地は至るところ



で断層ができ、道路といわず鉄道の線路も寸断された(上越線川口付近の捻じ曲げられた線路)(写真 6)[6]。私自身、本震直後に市内を車で移動しようとしても、国道でさえ目の前に高い壁のような段差が現われ、立ち往生せざるを得ないことが何度



もあった。

山古志や  
小千谷の中

山間地の地形を活かした伝統的な基幹産業である「養鯉」のための池や「コメ作り」のための棚田の壊滅的被害(写真 7)も大きかった。また、山古



志では大規模な畜産農家があり、その牛をどのように救出するか、知恵を絞ることになった。

長岡市内では、地区によって家屋の倒壊被害は極端に違っていた。長岡駅の東方の悠久山近くの古い木造の在来住宅では2階建てで1階が潰れている家(写真 8)がかなりあり、また、地盤の液状化が起こり、道路の至るところでマンホールの浮上



(写真 9)が見られた。また、南東部の台地上に造成された高畑団地では、台地周辺部の崖崩れがひどく、家ごと傾いたり倒壊しかかる家が多数にのぼった。」



わが家についてはコンクリートのアパートであり、断層の上下移動を直接受けることもなかったことから、建物にヒビが入ることはなく、建物周辺の地盤に若干の損傷を受けた程度で済んだのである。もちろん揺れは半端ではなかったことから、室内の家具や食器、家電品などの被害は大きかった。もっともわが家の目の前にあった市立体育館は、本来避難所となる役目を持ちながら、天井板などの落下が激しくその役目を果たせなかった。

#### ◆子を失った武者の号泣 — その中に、ある武者のひとり子の

「その中に、ある武者(ものふ)のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地(ついひぢ)のおほひの下に、小家を造りて、はかなげなるあとなしごとをして遊び侍りしが、にわかにくづれ埋められて、跡形なく平にうちひさがれて、二つの目など一寸ば

かりづつうち出されたるを、父母かかへて、聲を惜しず悲しみあひて侍りしこそあはれに悲しく見侍りしか。子の悲しみにはたけき者も恥を忘れけりとおぼえて、いとほしく、ことわりかなとぞ見侍りし。」

人は被災してまず心を砕くのは**肉親の安否**であり、ましてや目の前でその者が亡くなったとなれば、その悲しみは抑え切れるものではないであろう。武士という、当時では人前で涙をみせることは恥という建前の社会で、そんなこだわりにはとらわれずに号泣する父母を、長明は敢えて書き留めたのである。

中越地震では、死者が 68 名を数えたが、私自身が直接そのような場面に立ちあうことはなかった。しかし、地震に遭遇した時に、子供や配偶者が学校活動や勤務などで一緒に居なかったとき、「**その安否を確かめたい**」、あるいは「**自身の安否を伝えたい**」というのは人間の本性であろう。以前の**本ブログ No.64**の記事に書いたが、私自身は被災時に妻と行動を共にしていたことからそれほど切迫感はなかったが、避難住民が集まっていた市立図書館脇の駐車場で声を掛けた幼児連れの母親が、「一刻も早く長岡を仕事で離れている夫に、安否を伝えたいが、幼児がいると連絡手段をいろいろと試みることもできない」とのことなので、私達夫婦でしばらくその幼児を車の中で預かるという体験をしている。

関連して災害時の究極の肉親愛と行動について記している方丈記の一文を「**養和の飢饉 (1181-1182)**」の文面から紹介しておこう。

◆生死を分ける恩愛の深さ —また、いとあはれなることも侍りき

「また、いとあはれなることも侍りしき、さがたき妻・をとこ持ちたるものは、その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。その故は、我が身は次にして、人をいたはしく思ふあひだに、まれまれ得たる食い物をも、かれに譲るによりてなり。されば、親子あるものは、定まれることにて、親ぞ先立ちける。また、母の命尽きたる知らずして、いとけなき子の、その乳を吸ひつつ臥せるなどもありけり。」

飢餓という究極の生死を分ける状況下では、夫婦の場合には、愛情の深い方が相手に身を奉げ、親子の場合には定まって親が子に身を奉げるととらえている。そのことを「**命尽きた母親の乳房に吸い付いている赤子**」という情景で見事に描いているのである。

また大地震の記述に戻ろう。長明はうち続く大きな余震について語っている。

◆続発する大きな余震 —かくおびたたく震ることは

「かくおびたたく震ることは、しばしにて止みにしかども、そのなごり、しばしば絶えず。世の常、驚くほどの地震、二、三十度震らぬ日はなし。十日・廿日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或いは四、五度、二、三度、もしは一日まぜ、二、三日に一度など、おおかたそのなごり、三月ばかりや侍りけん。」

長明が体験した元暦の大地震では、本震以後、長期にわたって余震が続き、十日、二十日が過ぎてようやく減り始め、収まるまでに三月もかかったという。実は、私の体験した**中越地震**でも10月23日の本震に始まって、12月28日までM5.0以上の**余震が頻発**したことが特徴[7]である。その状況を方丈記風に記してみよう。

「M6.7の本震が夕刻に発生して、24時間以内にM5~6のものを含めてM4以上の余震が60回以上発生し、4日目までに累積85回までとなったが、その後は頻度は落ち着いて漸増となったものの10日目までに90回を越えたのである。その間、M6以上の余震は1回、M5以上が4回発生し、その後も66日後の12月28日までM5以上の余震が6回も続いたのである。このことは、避難所に身を寄せた被災者にとっても大きなストレスをもたらしたのであった。」

その中で私の**被災者としての余震についての実感**を述べておこう。本震当日は大きな余震が頻



繁に発生したことで宅内には家具、家電品、書籍、食器類が散乱していることもあり、自宅に留まることはあきらめ、**隣接する体育館付属の弓道場**で避難民として泊めてもらうこととした。地域の住民の他、体育館利用者が帰宅困難になった者などが着衣のまま毛布一枚でギッシリと横になり、石油ストーブで寒さを凌ぎ、**ひっきりなしに襲ってくる余震の状況**を伝えるラジオを聴きながら、仮眠で夜を明かした(写真10)。まさに

に恐怖と不安が同居したような心理状態であった。翌日は、地震の全容が少しずつ明らかになってきたが、山古志村など山村部の被害の状況はなかなかつかめない状況が続いた。余震に対する怖さと不安は、主として「**現在の自分の身体への危害**」と避難所に身を置いても「**自宅や関連の事業所や農業施設などが被る危害**」へのリスクから来るものであり、本震後の大きなストレスをもたらしていた。

これに対して**気象庁**は、本震発生後1日を経た頃から、余震発生状況の解析結果に基づき、**余震予知情報**を適宜発表[7]してきたのである。その表現は「**M6.0以上の余震が3日以内に発生する確率は20%である**」というようなものであった。これを被災住民はどのように受け取ったのであろうか？「もたらされる震度」「震源の場所」そして「発生の可能性」についての認識である。中越地震では余震の震源地も大きく動くことがなかったため、発表されるマグニチュードが被災民の位置においてどの程度の震度をもたらすのか、余震予知の当初からほぼ対応づけができたのであるが、「発生の可能性」については、余震予知の当初には、天気予報における降水確率ほどの意味的・経験的理解にも程遠いものであった。しかし、**頻繁に余震が起こる中で余震予知の確率値と実際に発生した余震の大きさや頻度を体験するうちにその実質的な意味を学習することができるようになった**。すなわち「“10%”が少ない」、「“20%”が起きても不思議でない」、「“30%以上”がほ

「ぼ起きそう」といった 3 段階程度の理解に至ったのである。何れにせよ、行動との関連でいえば、避難所と自宅のどちらで寝るか、常に緊急避難体制で行動をするのか、寝間着に着替えずに貴重品を用意して就寝するのか、水や食料を携行するのか、玄関に簡易な施設状態で寝るのか等の判断をするのに役立つ余震予知情報であると助かるのであるが、なかなか難しかったというのが実感であった。

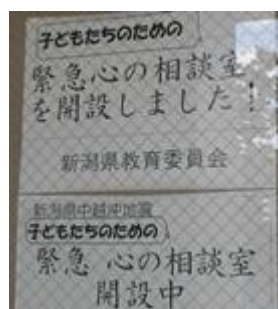
#### ◆すぐに忘れる無常の体験 — 四大種の中に、水・火・風は

「四大種の中に、水・火・風はつねに害をなせど、大地にいたりては異なる変をなさず。昔、齊衡のころとか、大地震ふりて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじきことも侍りけれど、なほ、この度には如かずとぞ。すなはちは、人皆あぢきなきことを述べて、いささか心の濁りもうすぐと見えしかど、月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。」

洪水、火事、暴風などの災害に比して、大地震は普段その異変の兆候もないまま、突然生起し、その災いを受け入れざるをえないのである。被災直後は、その自然の異変の前に人間の無力さを誰もが悟り、語り合うようになり、欲望や邪念などの心の濁りも薄らぐように見える。しかし、年を経るとそうした「無常」体験でさえ口に出す人がいなくなってしまうものである、と。

中越地震を体験した現在の中越地域の人々にとって、大災害の被災経験の記憶はどのようなであったろうか。

「大災害として記憶に残るのは、自然災害では“中越地震”と同じ 2004 年の三条や中之島で起きた豪雨下での信濃川水系支流の堤防決壊による“7.13 水害”[8]（写真 11:水が引いた後の中之島の街並）がある。また震災については、1961 年 2 月の積雪期の“長岡地震”（M5.2）[9]



や中越地震から 3 年後(2007 年 7 月)の柏崎を中心とした“中越沖地震”（M6.8、最大深度 6 強）[10]（写真 12:避難所の掲示）があり、中越地震を核として、被災民の自助、共助、公助の補完的な動員により、社会として災害を乗り越え、復興を果たしてきた自負のようなものを持っているようである。そして人為的な災害である戦乱による市街の破壊としては、幕末に新政府軍と戦い城も町も焼け野原となった“戊辰戦争”

(1868 年)、さらに第二次世界大戦の終戦目前で犠牲者 2460 名を出し、市街地の 85% 以上が焼失した“長岡空襲”(1945 年 8 月)が語り継がれ、深く市民の心の中に残っているという。

それらの背景には、この地の人達が、自らの被災体験やそこから得た叡智を後世

に伝え、活かすための様々な努力を積み重ねてきたことがある。」

具体的に、中越地震への対応を中心に概観してみよう。まずは、**震災メモリアルとしてのイベントと施設であり、そして叡智を後世に活かすための市民育成**である。



前述の長岡での災害の中で、多くの犠牲者を出したのが“長岡空襲”である。このことを記憶に刻み、復興のシンボルにするため、空襲の翌年8月に「長岡復興祭」が立ち上げられその翌年(1947年)から、明治以来続いてきた長岡花火大会[11]が、復興祭の中核に位置づけられ、現在に至るまで、長岡市民の世代を跨いだ空襲への思いを紡いできたのである(映画「この空の花ー長岡花火物語」大林信彦監督 写真13)。そして2004年秋のあの中越地震が再び、中越地方の住民の生活や産業活動を破壊したが、

市民の不撓不屈の魂を奮い立たせるべく2005年にはこれまでの大花火とはスケールの異なる「**フェニックス(不死鳥)**」(写真14)というテーマの創作花火が打ち上げられたのである。その後も、現在に至るまでフェニックスは中越地震への市民の記憶を呼び起こし、他の地域の大災害に対してもその翼に重ねた支援力をますます確固たるものになっているように思えるのである。



◆**震災メモリアルの施設を繋ぐシステムとして、中越メモリアル回廊[12]**が立ち上っている。そのねらいは、「新潟県中越大震災のメモリアル拠点である4施設、3公園を結ぶ中越メモリアル回廊。それは被災地・中越地域をそのまま情報の保管庫にする試み」とされている。それらの中から、私自身が特に印象深く思っているポイントを以下に紹介しておこう。詳細は、中越メモリアル回廊のHPを参照されたい。

(1) **おぢや震災ミュージアム そなえ館**:「17:56 シアター」3分33秒の映像 直下型地震そして一晩中続いた余震の恐怖を大型スクリーンの映像と大音響で再現(疑似体験)している。「地震動シミュレーター」中越地震の実際の振動波形を使った強烈な横揺れ疑似体験装置である。

(2) **妙見メモリアルパーク**: 92時間救出劇の現場を保存し、崖崩れ現場を実感するとともに、被害者への追悼の祈りを奉げる場として公園のように一部が整備されている。

(3) **長岡震災アーカイブセンターきおくみらい**：「エントランスの床面に記された“SOS”メッセージのシンボル」(写真 15) 震災直後に震源に近い川口の路上に救助を求める被災者のよって書かれた文字のコピー。「震災マップ」床面上の震災発生数日後の大きな航空写真上を歩きながら、手持ちの iPade 上に各震災スポットの情報が表示される。「図書スペース」地震・防災関連の書籍や調査記録・報告書等を保管、iPad で検索も。



◆災害経験により培われた叡智を後世に活かすための市民育成として、ここでは「中越市民防災安全大学」と「まちなか大学／大学院における防災関連コース」を紹介したい。前者は、「**社団法人 中越防災安全推進機構**」(2006年設立) [13]が開設している「防災安全に関わる実践的な専門能力を有する市民」を育成し、修了者には「中越市民防災安全士」を授与する市民大学講座であり、8年間で385名が修了している。



これに対し後者は、「**まちなかキャンパス長岡**」(2011年設立) [14](写真 15)のプログラムであり、子供から大人までの市民が様々な分野で様々なレベルの学びができる「学びと交流の場」として、長岡市内の4つの高等教育機関(3大学1高専)と長岡市が市民のボランティアを取り込みながら解説した活動体である。その学びのレベルに応じて、**まちなかカフェ、まちなか大学、まちなか大学院**が配置されており、

市民は関心分野について、次第に高度の学びを行えるような仕組みになっている。そんな枠組みの中で「防災関連の分野」は様々な大災害を経験し乗り越えてきた長岡地域としては重要な分野であり、特にまちなか大学／大学院では毎年、系統立てた学びのプログラムが提供されてきた。前者の市民防災安全士とは異なる理念で、より学術的、探究的な学びで防災に関わる知に根ざした能力を身につけてもらうことを目指してきた。ちなみにまちなか大学院の防災研究コースの定員は10名である。

近年のわが国における最大の自然災害は3.11東日本大震災である。東北地方から茨城県に至るまで未曾有の大津波にのみこまれ、それが同時に福島原発の人工物による災害を引き起こしてしまったのである。また、人類の社会・経済・産業活動の結果でもある地球温暖化の連鎖として気象異常(砂漠化、熱帯化、ゲリラ豪雨、台風の多発など)、海洋異常(深海高温化、海流異変、水産資源の変容など)、そして地殻異常(南海トラフ地震、火山噴火の活発化など)をもたらしているのではないかと危惧されており、人類の未来のために現代の私たちが責任を持って行動すべき時が来ているのである。

#### [参考資料]

[1] 鴨長明：方丈記(嵯峨本)、国文学研究資料館蔵、



- <https://www.nijl.ac.jp/pages/event/exhibition/2012/houjyouki.html>
- [2] 鴨長明(武田友宏編): 方丈記(全)、角川ソフィア文庫 A29、門川学芸出版、2011.
  - [3] ドナルド・キーン: 鴨長明、日本文学の歴史4 古代・中世篇4、中央公論社、  
pp.248-264, 1994.
  - [4] 新潟県: 新潟県中越大震災に関する情報、  
[http://www.pref.niigata.lg.jp/bosai/chuetsu\\_daishinsai.html](http://www.pref.niigata.lg.jp/bosai/chuetsu_daishinsai.html)  
平成 16 年新潟県中越大震災による被害状況について(最終版)、2009 年 10 月、  
新潟県中越大震災の被災状況等写真、2007 年 10 月 05 日
  - [5] 国土地理院: 中越地震災害状況図ページ、<http://www.gsi.go.jp/BOUSAI/NIIGATAJISIN/saigaijoukyouzu.html>
  - [6] 長岡技術科学大学中越地震調査団: 新潟県中越地震被害報告書、  
<http://coastal.nagaokaut.ac.jp/~jisin/report/index.shtml>
  - [7] 気象庁: 余震について「過去の地震の例」「余震の発生確率」、  
[http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/aftershocks/kako\\_aftershock.html](http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/aftershocks/kako_aftershock.html)  
[http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/aftershocks/kakuritsu\\_aftershock.html](http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/aftershocks/kakuritsu_aftershock.html)
  - [8] 新潟県土木部: 「7.13 新潟豪雨」による被害と対応状況、2005 年 3 月.
  - [9] 大沢胖、山本正勝: 昭和 36 年 2 月 2 日長岡地震の家屋被害について、  
地震研究所彙報(東京大学)、No.39、PP549-559, 1991.
  - [10] 新潟県: 新潟県中越沖地震記録誌、H21 年 3 月  
<http://www.pref.niigata.lg.jp/kikitaisaku/1245355313289.html>
  - [11] 長岡まつり協議会: 長岡まつりに想いを込めて、  
<http://nagaokamatsuri.com/omoi.html>
  - [12] 中越メモリアル回廊 HP、<http://www.c-marugoto.jp/>
  - [13] 社団法人 中越防災安全推進機構 HP、<http://www.c-bosai-anzen-kikou.jp/>
  - [14] まちなかキャンパス長岡 HP、<http://www.machicam.jp/index.html>